
冷やし銃火、はじめました

koyak

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷やし銃火、はじめました

【NZコード】

N7654V

【作者名】

k o y a k

【あらすじ】

『冷やし銃火、はじめました』

通りかかった飲食店に張られた怪しい張り紙。

主人公は冷やかし半分でその店の中に入つてみることに。

(前書き)

『冷やし中華』と『冷やし銃火』って音だけなら何だか似てるよね
!?

ところの思ひつきを基に、暑れで溶けきつた脳みそで書いてみました。
とてもとてもバイオレンスなお話です。

『冷やし銃火、はじめました』

ミンミンゼミがロックな雄叫びを全方位放射し続ける真夏の曇下
がり。

クーラーのきいた大学の図書館にでも涼みに行こうと歩いている
と、そんな意味不明な張り紙を掲げた店を見つけた。

誤字、なのだろうか。

ゼミやバイト仲間との話のネタにでもなるかと思い、のれんをく
ぐつてみる。

「ひつしゃい」

頬に傷跡らしきものが見える、某演歌歌手ぱりに鼻の穴が大きい
無愛想なオヤジが厨房から声をかけてきた。

飲食店としての最低限度くらいには掃除されている店内。
よくあるローカルな個人経営のラーメン屋といった様子。
他に客はないようだ。

店の奥からエプロンをつけた若い娘さんが出てきて注文をとりに
くる。

「「」注文はお決まりでしょうか」

さて、表のアレを、注文していいものかどうか。
もしただの書き間違えだったらちょっと恥ずかしい。

無難に冷やし中華を頼みそうになつてしまつが、この店に入つた本来の目的を思い出し、意を決して言つてみることにした。

「あの、表に書いてあつた『冷やし銃火』を一つ」

「無料で大盛りにできますが、どうなさいますか?」

「大盛り!?

ますます意味がわからない。

まさかどこかの地方では『冷やし中華』のことを『冷やし銃火』となまつたりするのだろうか。

「お、大盛りで!」

もうヤケである。

「『注文は以上でよろしくでどうか?』

「はい。あ、酢豚もつけて下さい」

ヤケになつたついでに追加してみる。ちなみに俺はパイナップル否定派。

「ありがとうございます。注文入りました! 冷やし銃火大盛りと酢豚です!」

店員が厨房に向かつて注文内容を伝える。

その瞬間。

タタタツ。

乾いた破裂音が断続的に聞こえたと同時に後ろから何かが頬をかすめていった。

タタタツ！ タタタツ！ タタタタタツ！！

左右。頭の上。右斜め前方。

脇や肩、頭のてっぺんや鼻先、耳たぶの下の辺りにも弾らしきものがかかる感触。

何だ！？ 何が起こっている！？

いつの間にかさつきの店員さんは姿を消していた。

よくわからんが、これはヤバい！

そう直感した俺は何とか避難しようと慌てて店の外に向かおうとした。

そのとき、出入り口のドアが勢いよくガラッと開いたかと思つと深緑色をした小さな物体がぽいっと外から投げ込まれた。

これ、もしかして、

バイナップル
手榴弾！？

世界を白く染める閃光と爆音。

いや、瞬時に視覚聴覚が麻痺してしまつたのでそれが閃光と爆音だったのかもわからない。

受け身もとれずに床に投げ出される。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

嫌だ、こんな所で死にたくない！ 死ぬときは腹上死つて生まれたときから決めていいるんだ！

煙で涙がにじむ。方向感覚も滅茶苦茶だ。それでも何とか脱出口を探そうと体を起こす。

「ゴリッ。

背中に冷たく硬い感触。俺はゆっくりと震える両手をあげた。次第に煙が薄れてきて感覚も戻ってくる。

前と左右に銃を構え迷彩服を着た人間の姿が見えた。その中の一人は頬に傷跡らしきものがあり、某演歌歌手ぱりに鼻の穴が大きなあのオヤジ。

畜生、畜生！ 僕が一体何をやつたっていつんだ！？ 父さん、母さん、親不孝なまま先立つちまつて、「ゴメン……っ！」

オヤジはじゅうと俺の目をのぞきこむと、捕虜の始末を命じる指揮官のように、告げる。

「『冷やし銃火』大盛り。以上になります。
お客さん、涼しくなれましたか？ いや～冷やし中華なんてどこの店でも出しているんで、他との違いを出すために始めてみたんですよ。どうでしたかね？」

「……」

俺はおもむろに迷彩服の一人が構えていた銃を奪い取った。

「あ、お代は950円になります」

「酢豚がまだよこの野郎」

ためらひごとなく引き金を引く。

乾いた破裂音と共に、放たれた銀玉は真っ直ぐにオヤジの鼻の穴へと飛び込んでいった。

(後書き)

お寒い話で恐縮です。
少しでも涼しく（寒く）なつていただけたでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7654v/>

冷やし銃火、はじめました

2011年10月8日23時26分発行